

恋人はスナイパー <偽りと隠された真実>  
作：ウッチャン大好きっ子

\* < > で閉じられている会話は、中国語での会話になります。

新キャラ

1. 羅聡 (らそう)
2. 碧河 葵

~ 第3章 ~ < 激震 >

- 湯華鳳 -

5月4日 - 連休2日目、早朝3時、雁太郎は突然目を覚ました。  
再び目を閉じるが、眠ることができなかった。眠れずに時間が刻々と過ぎ、朝4時になろうとしていた。

雁太郎は寝るのを諦めて、温泉に入ることにした。

雁太郎が浴場に入ると、やはり早朝だったので誰も居なかった。

静まり返った浴場に、雁太郎は不思議な感覚を持った。

それを振り払う様に雁太郎は体を流し、静かに温泉に浸かった。

だが、その瞬間、雁太郎が先に感じた物がはっきりとした。それは、。。

言い表せないほどの大きな不安に似た嫌な予感だった。

それは、身近な人に関わっているようなそんな気もしたのである。

しかし、家族の者は皆、ここに来ている。

とすれば、ホイさん (= 王 凱歌) の母である市江さんのことが頭をよぎった。

市江は心臓を悪くし、今は入院している。

順調に治ってはいるが心臓病であるので、不安はあった。

雁太郎の勘は良く当るのである。雁太郎は、この強い嫌な予感からすぐに、温泉から出て市江の居る病院に連絡を入れた。

市江には何も起きていなかった。しかし、ほっとすると同時に、「一体あれは何だったのか、。。。」

雁太郎は「気のせいだったらいいが、。。。」と思いつつ、家族を起こさない様に部屋に戻った。

「このことは家族には言わないでおこう」 雁太郎は心に決めた。

- 朝7時 -

家族が徐々に起きてきた。

雁太郎はみんなが起きてきてから、今日の予定を発表した。

家族のみんなは、突然の事に戸惑いつつ聞いていた。

雁太郎はあの温泉の後、部屋で今日の予定を考えていたのである。

きなこは予定を聞きつつ、昨日の飲み過ぎでガンガンする頭を押さえていた。

雁太郎は、近くにある湖に行くか、これも近くにある山の散策の二つを提案した。

湖は、とても綺麗でフィッシングやボートに乗ることができるのである。

釣った魚は食べることができる。

山は、ちょうど新緑の季節に入り、とても美しい。山頂付近には、おいしい山菜料理のお店があるというのだ。

朝食後、今日は湖に行くことに話し合いで決まった。その代わりに、明日は山に行くことにした。

そうと決まると、はなや美智は早かった。早速、準備を始めた。

- 30分後 -

湖に着いた。

雁太郎はフィッシングをすることにした。

きなこら3人は、ボートに乗った。みんな、存分に楽しんでいた。

昼食は雁太郎が、大量に釣った魚を塩焼きにした物と、露店で買った物で過ごした。

昼食の後は、湖のそばで見つけたテニス場で、テニスをすることにした。

テニスでは、きなこ対雁太郎の対決がなかなかのものだった。周りにいた人々からも歓声上がるほどであった。はな対きなこは、凄いものだった。白熱し初めてはなが激しくきなこことぶつかり合った。

そんな中で、意外にも長時間の対決になったのが、美智と雁太郎の夫婦対決が白熱した。

今までの不服をぶつける様に、凄いやりあいだった。きなこははなは、「止めないとまづいかな」と考えるほどだった。

- 夕方 -

テニスを終えて、静かに湖を赤く染め、消えていく夕日を家族で見ている。

きなこら女性3人は、その美しさに感動していた。雁太郎は、早く帰って夕食が食べたい様である。

雁太郎は、「そろそろ帰るぞ!」と言い、車へさっさと行ってしまった。

女性3人は、不服そうに車に向かった。

旅館に着くと、もう夕食の準備をし始めていた。

みんな運動して汗だくになったので、食事の前に温泉に行くことにした。

きなこらが温泉からの帰りに、テレビが置いてあるお客の溜まり場のような所に、多くのお客が集まり、騒がしかった。

きなこらは、気になり見てみることにした。

「どうしたんですか?」 きなこは、そばに居た人に聞いてみた。

「どうも、凶悪犯が逃亡したらしいんですよ。」

きなこは、刑事として非常に気になると同時に、連休前に不安に思っていたあのことが脳裏によぎった。もちろん、家族は「ホイさんでは?」と思い、最悪の結果を考えていた。

きなこは、すぐにテレビに目をやった。

ニュースでは、王 凱歌が警察庁から逃亡したことをスクープとして報道していた。

内容は、連休前の2日の夕方に逃亡したというものでした。

きなこらは、愕然とし、そして「有り得ない。どうして!」と強く思った。

きなこはすぐに、警視庁に電話をしに行った。

雁太郎は、「今朝の嫌な予感はホイさんのことだったのか、、、。だが、なぜ、、、。」と思った。

雁太郎と美智は、このことを知って、不安がっているかもしれない市江に電話をしに行った。

- 数分後 -

市江に電話した雁太郎と美智が帰ってきた。市江はかなり動揺しているようだったが、電話したおかげで大分落ち着いた様だ。

きなこは、まだ電話中だった。船木に携帯電話を持って行かなかったことを怒られていた。

しかし、それ以上にホイさんのことを気になり聞いた。報道は本当なのかを、、、。

船木は、3日に集まってくれた刑事たちに言ったことを手短かに話した。

それを聞いたきなこは、ホイさんが自分の意思で逃亡したのではないことが、分かっただけでもほっとしてしまった。がそれと同時に、ホイさんを連れ去ったのは、1211と確信した。

「あの不安が。もっと注意していれば!」 きなこは心の中で叫んだ。

船木は「もう遅いから、今日はしっかりと泊まって、明日戻ってきていいぞ。」と言ったが、きなこはホイさんのことが、心配で居てもたっても居れないので帰ることにした。

きなこは雁太郎らが、待っている泊まり場に行き、すぐに帰る事を告げた。  
雁太郎らもホイさんのこと、市江のことが心配だったので、「一緒に戻る。」と言い出した。

きなこは、「みんなは明日、ゆっくりと帰ればいいよ。」と言ったが、美智やはなに「車は一台しかないのに一緒に帰らないでアンタ、一体どうやって帰るの。」と痛い事を突かれた。しかし、きなこははなが言った言葉に心を強く打たれた。

「お姉ちゃんだけがホイさんのことを心配しているわけじゃないのよ！」

このはなの言葉に、雁太郎と美智は強く頷いた。「そのとおり。」と言いつつ。

きなこは共に帰ることにした。

すぐに、旅館のフロントに行き、帰る事を告げた。

始めは戸惑っていたが、その焦りに満ちた瞳を見た瞬間に女将さんはその重大性を悟り、料理を簡単ではあるが、持ち帰れる様にしてくれた。

それに感謝しつつ、準備の間に帰り支度をした。

- 30分後 -

すべての準備を終え、急な帰りに快く了承し送り出してくれた女将さんに、車の中から礼を言いながら円道寺家は出発した。

帰りの道中は行きと違い、とても重い不安と心配が車内を強く包み込んでいた、、、。

- 2時間30分後 -

行きと違い、連休の半ばであり、夜であったこともあり道がとても空いていた。

そのお陰で、30分も早く着くことができた。

きなこは、家族を家のそばで降ろし、そのまま本庁に向かった。

本庁では船木が連絡を受け、きなこを待っていた。

静かに荘厳な雰囲気を出しながら、、、。

その船木の雰囲気に驚くと同時に、電話で聞いていたより良くない事態であることを悟った。

船木から、凱歌が消えた状況を聞き、きなこは愕然とした。なぜなら、このような事態が起こるといふ事は、警察内に1211のスパイが居ることになるのである。

暫しの沈黙の後、きなこは「捜査状況は？」と現在の捜査状況を船木に聞いた。

船木は少しの沈黙の後に「何もつかめていない、、、。」と、悔しさの籠もった声で小さく答えた。

捜査は、ほとんどいやまったくといってよいほど進んでいなかった。何もつかめなかったのである。

「今日はもう遅い。今日はもう帰って、ゆっくり体を休め。新潟から直でここに来たのだろう。明日に備えて、今日は帰るんだ。」船木は、優しさの籠もった声できなこに言った。

きなこは、それに従った。本当に、長時間の運転に疲れていた。

- 紅龍 -

車から降り、家族は家できなこが帰るのを静かに待っていた。

1、2時間して、きなこが帰ってきた。家族はホイさんの事を聞こうと、集まってきた。

きなこは、その家族の団結にただただ呆れ、驚いた。

きなこは、船木から聞いたホイさんの捜査状況を簡単に話した。一同は、その話に固唾を飲んで聞いていた。

きなこは話し終わると、大きく深い溜息をついた。

この日は、皆が新潟から急いで帰ったこともあり、すぐに寝ることにした。この話については、明日ということになった。

朝は昨日旅館で包んで貰った食事を食べることにした。

朝から紅龍に暗い影が落ちていた。朝食だというのに、会話がなかった。みんな黙々と食べていた。

きなこは、今日から出勤するので準備をしていた。そんな中で、雁太郎はふと一言言った。

「ホイは家族だ。きっと元気で居るさ。悪いことなんかしてない。」と微笑んで言った。家族は、その雁太郎の言葉に元気になった。皆が「そうよ。」と言った。

#### ～第4章～ <不穏な影>

薄暗い室内に聳え立つ番人のような威圧感を持つ椅子が一つ、部屋の真ん中にあった。その椅子には暗く、良く見えないが誰かが座っていた。座っているというよりも力なく寄りかかっているという感じであった。

そこに居たのは、、、王 凱歌だった。しかし、気を失っているのか、動かなかった。

突然、部屋の扉が開いた。現れたのは、中国人らしき杖を突いた老人だった。

その後ろからは、范 火清が現れた。

力なく椅子に座っている凱歌の前で何やら話し始めた。

< 羅聡。早く、凱歌兄さんに例の物を付ける。ボスは早く成果を見たいとおっしゃっている。 >

< 分かっております。しかし、例の物を付けるにはまだ準備ができておりませんので、少々のお時間を。 >

< 分かった。ボスには、その様に伝えておくが、さっさとしないと消されるぞ。 >

そう言い残すと、范は部屋を出ていった。その瞬間、老人の表情が変わった。

< あいにくだがそれはないぞ。若造。わしの代わりなど居らんからのう。 > と冷血に羅聡は言った。

一人残った羅聡は凱歌に近づき、注射のようなものをポケットから取り出した。

それを、そっと首筋に向け、進めた。その時だった。凱歌がわずかだったが動いたのである。

羅聡は、首筋に向け進めていた針を止めた。羅聡は、凱歌が気を失っていることを目で確認し、再び針を首筋に向けた。

耳が痛くなるほどに静まり返り、張り詰めた空気が室内を支配していた。

そして、羅聡は凱歌の首に針を刺し、薬を凱歌の体内に入れた。

その瞬間、気絶していたはずの凱歌が目を覚まし、悲鳴を上げながら悶え苦しみ出した。

羅聡は、その光景を少し離れた所から見ていた。不敵な笑みを浮かびて、、、。

しかしその時、羅聡が予想しなかったことが起きた。悶え苦しみながら凱歌が、羅聡に向かってきたのである。

羅聡は咄嗟にその攻撃を避けたが、凱歌は苦しみながら叫んだ。

「一体、俺の体に何をした！！」

羅聡は凱歌の強い精神力に舌を巻きつつ、凱歌の叫びに答えた。

< お前がお前でなくなるのようにしたんじゃよ。永遠に我らの道具にするためにな。 >

その声は静かにそして、冷血な声だった。人間を人間と思っていない者の声だった。

凱歌は、羅聡を無視して部屋をよろめきながら出ていった。

羅聡は、そんな凱歌を追わなかった。冷酷な眼差しでそれを見ていた。そして、呟いた。

< ここから出られたとしても、君には何もできんよ、、、。何も。 >

しかし、その予想は外れたのである。

凱歌は、1 2 1 1の追っ手を倒しながら、外へと出た。しかし、そこは断崖絶壁の海が広がっていた。

追っ手達は、崖っぷちに追い詰められた凱歌に少しずつ近づいていった。

捕まえようとしたその瞬間だった、凱歌は激しい苦痛から足がふらつき、海へと落ちていった。

追っ手達は、慌てて崖下を見たが、凱歌の姿はなかった。追っ手達は大きく凱歌の搜索を始めたが、3時間経っても見つからなかった。

天候が急激に悪化してきた。嵐のような暴風が吹き荒れた。  
凱歌の捜索は、足止めを食らった。

- 東京・警察庁 -

未だに、王 凱歌についての情報が掴めずにいた。

きなこ達国際二課の面々は焦っていた。その時だった、船木が見知らぬ男性を連れてやって来た。

しかし、近づいてくるに連れて、刑事達の顔色が変わっていった。

刑事達は、一斉に同じ事を思った。「王 凱歌だ」と。

きなこは、その顔、姿、雰囲気からホイさんだと思い、「ホイさん！」と口にしてしまったほどである。

船木は刑事達の動揺に気付きつつ、前と進み、話し始めた。

「みんなに紹介する。今回の王 凱歌逃亡事件のために、国際二課に配属になった碧河 葵刑事だ。」

少しの間、刑事達のどよめきが止むのを待ってから、船木は再び話し始めた。

「みんなも驚いていると思うが、碧河刑事は王 凱歌にとっても良く似ているが、まったくの別人だ。しかし、似ているのは姿だけではない。王 凱歌と同じで中国人と日本とのハーフで、武術の達人でもある。今回の捜査では上から命令もあるが、きなこ君と組んでもらうことになる。きなこ君、頼んだよ。」

きなこは最後の言葉にビックリして固まっていた。

船木が言い終わると、凱歌に似た刑事、碧河 葵が話し始めた。

「始めまして。先ほどご紹介に預かりました、碧河 葵と申します。僕は、確かに中国人の父と日本人の母を持っていますが、国籍は日本なのでその点が違います、、。得意なことは先ほどありましたが、武術が得意です。この課には、とても武術がお得意な女性刑事がいらっしゃると思っています。是非、お手合わせ願いたいと思っています。分からない事ばかりですが、皆さんよろしく願います。」

きなこは、その余りにも似すぎている彼を驚いて見ていたと同時に、「どうして私となの!？」と疑問に頭が一杯になってしまった。しかし、彼女には彼の瞳にホイさんと同じ、暗くそして深く重い悲しみが籠もっていたのに気が付いた。

船木は、碧河にきなこを紹介した。

「この女性が、さっき言っていた武術が得意な円道寺 きなこくんだ。」

二人は、挨拶をした。

近づいて尚気が付いた。気配すら、ホイさんと同じだと言うことに。普通の人では分からないかもしれないが、一緒に手錠で3日間も行動を共にしていたので、きなこは分かったのである。

きなこは、心の中で「一体何者なの、、。」と思っていた。

とりあえず、きなこは碧河に冗談で「じゃあ、相手してくれる？」と言った。

碧河は「ええ。よろしく願います。」と淡々と答えたのである。

この答えに、船木はビックリしていた。しかし、きなこは碧河の力を確かめたいと思っていた節があったので、手合わせをすることになった。

- 警察庁・武道場 -

胴着に着替えたきなこ碧河が向き合った。

心配そうに見つめる船木ら国際二課の面々が居た。もちろん、楽しんでいる者も居た。

双方が構えをした。きなこは得意の少林拳の構えを、碧河は、なんと！王 凱歌と同じ詠春拳の構えだった。きなこは、これにはかなり動揺した。

審判が「始め！」と言い、二人は試合を始めた。

- アクションシーン -

(アクションシーンは皆様の想像で。内容は、どちらも始めは双方の力を確かめ合っている内にだんだん本気になってきてしまう。というものです。エピソード1の二人の戦いのような感じで、。)

長く続いた試合は、双方の消耗が激しく審判によって止められた。

今回は、引き分けになった。まさに、この試合はきなこにとって凱歌との始めて戦った時を思い出させた。

二人は、少し休憩をした後、資料を調べることにした。きなこには、碧河と一緒に居るとホイさんと一緒に居るようで楽しかった。

- 数時間後 -

きなこと碧河は資料を調べ終わり、資料室から戻ってきた。

きなこは、もう7時を過ぎていることに気が付き、驚いていた。

二人は帰る事にした。きなこは、「家に遊びに来ない？」と誘った。それは、新たなパートナーとしてもあったが、ホイさんに似た碧河を見たら、みんなが少しは元気になるのではないかと、思ったからでもあった。

碧河は、始めの内は断っていたが、結局行くことになった。

- 紅龍 -

きなこはいつもの様に帰った。雁太郎や美智は、挨拶もそこそこに色々な事を言ってきた。きなこは、碧河が入ってこない事に気付き、碧河を呼んだ。「碧河さん~！」と。

美智は、お客が居る事に気付き、慌ててきなこに「どうして、お客さんと呼ぶんだったら早く言いなさい。」と言い、整理を始めた。

きなこは慌てて説明した。「碧河さんは、私の新しいパートナーなの。だから、そんな慌てなくていいよ。」と。しかし、美智すれば、「何を言っているの？」と言った状態だった。

そんな中、碧河が恐る恐る入ってきた。この日本に来たばかりのホイさんのように、。

雁太郎達は碧河を見るなり、やはり凱歌に関わった人間には、碧河が凱歌に見える様で、一斉に「ホイさん~!!」と叫んでしまった！しかし、そんな中で、雁太郎だけが疑うような目をしていた。

困った様に碧河はきなこを見た。そんな碧河にきなこは、笑いながら居間へと連れていった。そこで、きなこは、碧河が凱歌ではないことなどを説明した。

家族達は、やはりがっかりしてしまい、碧河は凱歌の振りをするべきだったのではないかと、きなこに聞いてしまうほどだった。しかし、雁太郎だけは一目で「違う」と分かったと言うのである。

これには、碧河は内心驚かされていた。もちろん、きなこも美智やはなは、驚いていたが信じていない様子だった。

この夜は、円道寺家の電気は深夜まで付いていた。しかし、この碧河またしても凱歌と同じ特徴があったのである。それは、お酒が苦手であるという事だった。まさに、何から何までそっくりである。

~ 第5章 ~ < 記憶と悪魔の計画 >

碧河が国際二課に来て3日が経った。

この日、碧河は朝から国際二課に居なかった。理由は、前の上司から急な頼む事のために1日居ないことになっていた。しかし、この日は運命の悪戯が起きたのである。

- とある海岸 -

2日前のことである。たまたま夜に散歩をしていた老人が、海岸で男性が倒れているのを発見した。老人はその男性を自宅に運んだ。

怪我はほとんどなく、ただ気を失っている様に見えたために、老人は救急車を呼ばなかった。

その他に理由があった。この老人は、2年前まで医者をしていたのである。

老人は、この男性が何か訳ありではないかと、直感的に感じたのもあったからである。

朝になり、老人は男性の状態を再度確認しに行った。しかし、そこには置き手紙だけが残っていた、。。

そこには、「手当てしていただきありがとうございます。直接お礼も言わずに居なくなる事を許してください。」と、書いてあった。一生懸命怪我をした手で書いたのだろう、大分字が歪んでいた。

老人は、この手紙から書いた男性の人柄を感じ取った。とても礼儀正しい、優しい人と、。。。

「怪我をしている手で、こんな手紙を、。。。」と老人が微笑んで呟いた。

その男性は「行かなくては、。。。」という思いだけでとある所に向かった。

ヒッチハイクなどしながら、何かに取りつかれたように進んでいった。しかし、彼には何か足りないような感じがあった、。。

- 2日後（現在） -

その男性は、「行かなくてはならない」と思う所のそばに辿り着いた。しかし、そこが何なのか、何があるのかさえ、思い出せずにまだいた。

ここは、とある商店街の入り口である。「この先に何があるのか。」その男性はそんなの気持ちで一杯になっていた。

その時である、男性は言い表せないほど強い”殺気”のようなものを感じ取った。男性は、居ても立っても居れずに、目指す場所に走っていった、。。

男性が目指していた場所。そこは、『紅龍』だった。そう、この男性こそ、あの断崖絶壁から落ちた王 凱歌だったのである。そして、足りない何かとは、。。、『記憶』だったのである。

彼は、あの断崖絶壁から落ちたせいなのか、あの羅睺に打たれた薬のせいか記憶を失っていた。しかし、彼は、『紅龍』のことと『日本語』だけは、”大切なもの”として覚えていたのである。

彼は、紅龍の中にはなぜか入れなかった。入っては行けないような気がしたのである。

彼が佇んでいた時だった。美智が店の前を掃除しに出てきたのである。美智は、凱歌には気が付いていなかったが、凱歌は美智を見るなり、ほっとする自分に内心驚いていた、。。

そんな時、先ほど感じたあの”殺気”を再び感じたのである。

その時、凱歌には美智への光の筋のような直線が見えた。そして、それはとても危険なものであるものだど体を感じたのである。無意識に凱歌は走り出していた。美智を救うために、。。。

その瞬間、「ブシュ。」という小さな発射音が、商店街に木霊していた、。。

先ほどまで美智が立っていた所には、一人の男性が立ち、小さな穴が一つ地面に開いていた。美智は突然突き飛ばされたが、怪我はなかった。しかし、男性を見た時、美智には「碧河さん？それともホイさん？」と悩みながら言った。男性は、弾が掠めたのか腕から血が滲んでいた。

その時だった騒ぎに気付き、店の中から牛田と雁太郎が慌てて出てきた。牛田はそこに立っている彼がどっちなのかと悩んでいた。

ところが雁太郎は一目見るなり、「ホイさん。」と声を掛けた。しかし、凱歌は反応しなかった。記憶がなかったからである。

凱歌は、まだ危険が残っていることに気付いており、みんなを店の中に押し込んだ。

「まだ危険です！中に居て下さい。」と言い、外へと出ていった。雁太郎は、反応しなかったこと、他人行儀だったことから記憶喪失では思い、急いで再び外に出たがもうそこには誰も居なかった、、、。

その頃、凱歌は狙撃したスナイパーが何処に居るのかに、何となくだが分かっていたのである。それは、体に染み付いているスナイパーとして経験からだろう、、、。辛い事に、、、。

そして、狙撃地点に着いた。そこに居たのは、范 火清だった。それを見た瞬間、凱歌は記憶を思い出し始めた、、、。

しばらくの沈黙の後、范は、凱歌に向けて「凱歌兄さん。どうしてここにいるんだ。手伝ってくれるのかい？」と言った。

この言葉で、完全に記憶を取り戻したのである。大切な人を傷つけられた怒りと共に。

凱歌はしっかりと声で「思い出したぞ！范、なぜ美智さんを襲う！許さないぞ。」と言い、構えを決めた。

范は、この凱歌の言葉に状況を理解し、「凱歌兄さんは、まだ治療が終わっていない様ですね。あんたを連れていく。」と言い、こちらも構えを決めた。

しかし、その時だった突然、周囲に煙が立ち込め、二人は気を失った。

煙の中から、羅聡が防護マスクをして現れた。

<勝手に、わしのモルモットに怪我をされては困るのでのう。連れていけ。>と羅聡が言い、手を叩き合図を部下たちに送った。部下たちは范と凱歌を連れていた。

紅龍では、雁太郎がさっきの男性は凱歌だと言って、探しに行こうとしていた。そんな中、美智はきなこに電話していた。このことを知らせるために。しかし、なかなか繋がらなかった。

数分経ってやっと電話が繋がった。きなこはその時、武道場で稽古をしていたのである。今日は、碧河という最高の稽古相手がいないので、他の人を相手に物足りなさを感じていたのだ、長めに稽古をしていたのである。

きなこは、『工作中に、、、。』と思いつつ電話に出た。「もしも。あぁ～、母さん。何？」と言うと美智は、先ほど起きたことを説明した。きなこは、驚くと同時に『碧河さんと間違っているのでは？』と思い、「本当にホイさんなの？」と聞いてしまった。美智は、雁太郎が「絶対にホイさんだ」と言っている事を伝えた。それには、きなこも納得した。なぜなら、雁太郎は碧河と凱歌を一目で見分けることができるからである。

きなこはすぐに、船木にこのことを伝えた。

船木はすぐさま、刑事を向かわせた。もちろん、きなこもである。

- 紅龍前 -

紅龍の前には、多くの野次馬が集まっていた。

刑事たちは、てきぱきと整理をして、現場検証を始めた。

きなこは、家族の所に行き、話を詳しく聞いていた。

家族から話を聞けば聞くほど、ホイさんの異常が分かってきた。やはり、雁太郎が言っていた『記憶喪失』なのではないかと、きなこそして刑事たちは思った。

そして、凱歌は1211に連れ去られたという事が、はっきりした。

刑事達は、1211が再び動き出したこと、そして凱歌が1211から逃げていることを。このままでは、凱歌と凱歌の関係者が危険であることを、、、。

- 1211・日本支部 -

<凱歌は、捕獲できたのだな、、、。分かった。すぐに、例の計画を始めろ！すぐにだ！分かったな、羅聡！>

<分かりました。支部に着き次第にすぐさま、致します。>

電話はそこで切れた。男は<もう少しだ、、、。もう少しで、お前は再び私の元に、、、。>と呟いた。

薄暗い室内。大きな窓があり、その前には大きな机が一つあった。その席には、サングラスを掛けた男が一人座っていた、。

その男はコー村木であった。コーは、凱歌に逃げられたことでかなりご立腹であったが、捕まえる事ができたので少々気分が良くなったようで、雷鳴で見える顔には不敵な笑みを浮かべていた。

窓の外は、黒い雲が立ちこめ、雷鳴が轟いていた。これから、起こる恐ろしい計画を暗示しているかのように、。

- 1 2 1 1 ・地下実験室 -

暗い室内にあの聳え立つ椅子があった。その椅子の前には、凱歌がうつ伏せに手術台に寝かされていた。そのそばには、羅聡が機械を準備していた。不敵な笑みを浮かべながら、。

< 凱歌。君は世紀の大実験のモデルになれるのだ。喜び賜え！さあ、真の殺人マシンになるのだ！ > おぞましい笑い声が響き渡った。

羅聡は、機械のスイッチを入れた。

凱歌の首筋に向けて機械のアームが動き始めた。そのアームの先には、チップのような物が付いていた。そして、凱歌の首筋にアームの先にあるチップが触れた。

首筋に、チップのような物がくっついた。その瞬間、凱歌は目を見開き、叫びを上げた。その横で羅聡の高笑いが、響き渡っていた。

- 数秒後 -

部屋には再び沈黙が広がった。

そして羅聡の横には、瞳の色が失われた無表情な王 凱歌が立っていた。

まるで、人形の様に、。

新たなる嵐が舞い降りようとしていた、。

- 続く